◆連載 いま留萌むかし

・ニシン、鰊、鯡、二親魚

今年の五月は三十年ぶりに留萌の浜がニシンの大漁に沸いた。各報道機関が揃ってとりあげ、全国放送された程である。これを聞きつけて、道内の太公望たちは、我れ先にと留萌港の岸壁に鈴なりに釣り糸を垂れ、おこぼれに預かろうとしている。

留萌の浜の、いや北海道西海岸の春を告げるニシンの姿が消えてもう三十年の歳月が流れた。かつてのニシン場の賑わいを知る人たちも、今では少数派になろうとしている。

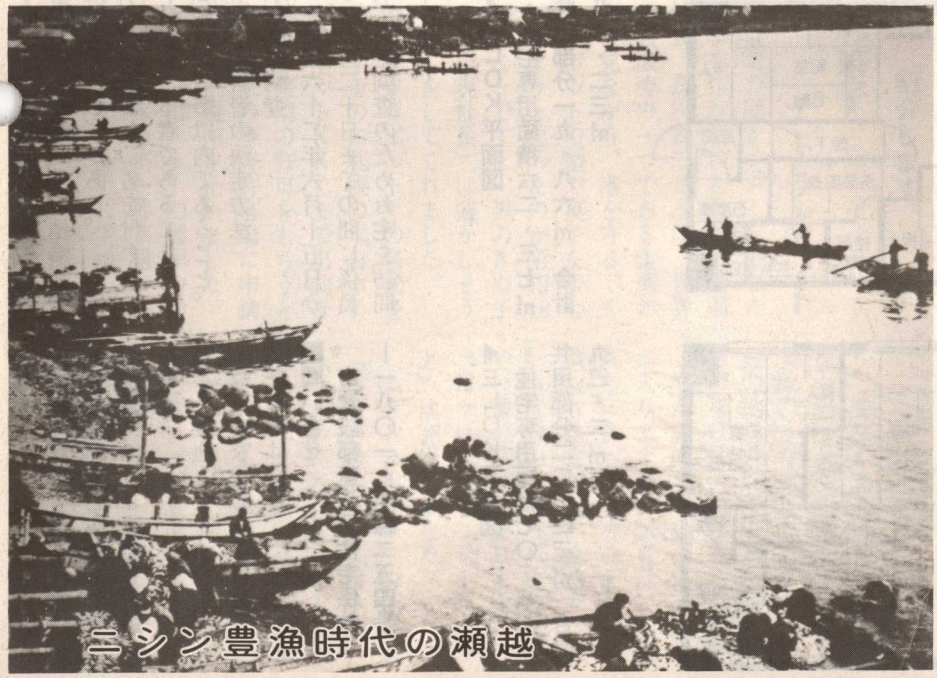
ニシンは「鰊」、「鯡」、「二親魚」、「春告魚」などと書く。アイヌ語では「ヘロキ」、または「エロキ」という。この魚は、イワシの仲間で、北半球の寒流域に棲息している。そして、この魚ほど北海道の開拓の歴史と密接に結びついてきたものはない。

ニシンが北海道の産物の中で脚光を浴びたのは、日本の近世農業の進展と関係が深い江戸時代まで、ニシンは、東北地方北部日本海側まで分布していた。北海道は、その頃蝦夷と呼ばれ、アイヌの人たちが春になるとやってくるニシンを、わずかにタモ網ですくいとって、干物などにして食料としていたらしい。ところが、江戸時代の中頃、日本の農業の発展に伴い、魚粕肥料の使用が一般的となってくる。その当時、魚粕肥料としては干鰯が一般につかわれていた。しかし、蝦夷地で獲れるニシンの魚粕が肥料として優れていることが判り、ニシン粕の需要が爆発的に増加していった。そのため、蝦夷地では、大商人や漁師たちにより大網がつかわれはじめ、大量にニシンを捕獲するようになった。

はじめは、蝦夷地でも松前近辺の和人の住んでいた地方でニシン漁が行われていた。だが、時代が下るにつれて、だんだんとその地方が不漁となり、江戸時代の中頃になると追鰊と称して、奥地へ漁場を開くものたちが増えてきた。そして、千八百年代の中頃、とうとう留萌にも多くの漁師たちが入りこむようになるのである。それから約百年間にわたって留萌はニシンとは切っても切れない縁で結ばれ、ニシンの千石場所と呼ばれてきたのである。

一網千両、一網万両といわれ、豊漁の年はニシン景気に沸いたという。しかし、好不漁の波が大きく、ニシン漁の経営には多額の資本が必要だったことから、建網の網主たちの入れ変わるのも激しかったという。

春三月になると、雪融けの水音とともにヤン衆たちがやってくる。今まで、ひっそりと雪の中に埋もれていた留萌が一気に動きだす。番屋の前の雪割り、薪材集めの山行き網つくろい、土俵づくりと仕事はつづく。四月に入ると、あちらこちらから、ぽつぽつ初ニシンの知らせが届く。準備をするヤン衆たちの腕に一層力が入るのがわかる。もうすぐ網おろしだ。ニシン雲りの空の下にニシンの群来る日がやってくる。



ニシン豊漁時代の瀬越

昭和62年6月／発行・留萌市
編集・総務部秘書企画課
印刷・株式会社 留萌新聞社